

Lesa Scholl, Emily Morris and Saria Gruver Moore, eds.,
Place and Progress in the Works of Elizabeth Gaskell.

Surrey: Ashgate Publishing Limited, 2015. 246pp.
Hardcover £70, ISBN: 978-1-4724-2963-6

宇田和子

I. 出版の経緯

本書は、University of Colorado にて 2012 年に開催された、第 20 回 British Women Writers Conference (BWWC) を機に誕生した書である。この大会では、3つの基調講演、約 160 の口頭発表、シンポジウムが1つ、そして修士課程モデル授業参観が3つ実施された。大会は世界中から参加者を得て、参加者たちは偶然の出会いのもと、共同して日程に参加した。そうした中、時の共有と知遇を活かし、大会 20 周年を記念する論文集を発行する案が生まれた。論文集の出版は、ギaskell 没後 150 年記念ともなるよう計画された。

論文集の keywords は “place” と “progress”。ギaskell の時代は、産業革命が進展し、種々の工業技術が進歩し、科学もまた急速に進歩して、鉄道が発達し、貿易も拡大した “progress” の時代であった。こうした “progress” は、イギリス国内における “places” を、そして世界中の “places” を連結し “globalization” を推し進め、全世界を、政治的・経済的・文化的に “borderless” なものへと変容させた。19 世紀のこうした状況は、今日 21 世紀の状況と相まっており、2つの keywords はギaskell 没後 150 年記念にふさわしいものだった。

世界中への呼びかけに応じて、世界中から寄せられ採択された論文は、15 編。アメリカとイギリスが多いが、カナダ、オーストラリア、ギリシャ、ハンガリー、シンガポールと、論文執筆者の国籍は多岐に渡っている。“Notes on Contributors” によれば、執筆者たちは PhD candidate から大学職を定年となった人まで研究上の立場も幅広い。執筆者たちの出版物も単著、共著、編著、雑誌論文など、出版形態も多様であり、そしてまた出版国も多国にまたがっている。15 執筆者の一人のプロフィール中には、「Mitsuharu Matsuoka of Nagoya University, Japan 編による論文集に出版準備中」との記載もある。

さて、本書を生む母体となった British Women Writers Conference は British Women

Writers Association が毎年 1 回、6 月にアメリカ合衆国各地の大学を会場校に開催している大会である。この学会は対象を “for scholars of 18th-19th century British women writers” とし、活動は “provide a forum to discuss women’s writing—writing which has been historically overlooked, ignored, or excluded from the canon” としている。2017 年 6 月に、大会は 25 回目に達し、会場校はノース・カロライナ大学であった。以前の大会に遡って本大会に興味深い点は、各種体験が用意されていることである。例えば、ジェイン・オースティン時代の服装で会合する体験会もある。会場校付近の美しい風景を見るためのハイキングもある。国際学会では、ただ単に発表と講演といった、いわゆる学術活動だけでなく、趣向を凝らした体験プログラムや会場校を出たイベントを実施することは多いが、体験やイベントは、研究者の視野と経験を広げ、研究者同士の人の輪を作り、ひいては学術研究に資する。日本でも、積極的に取り入れるべきだろう。

II. 本書の内容

II-1. 本書の構成

本書には 4 つのパートが設けられ、Part I, Home Geographies: “home” は家庭、国家、ひいては帝国と定義づけられるであろうが、拡大の大きかったヴィクトリア調において “home” が固定した空間ではなくなっていることが論じられている。Part II, Mobility and Boundaries: 移民にまつわる問題を扱っている。Part III, Literary and Imagined Spaces: ヴィクトリア朝における技術進歩は、鉄道網発達等を通し「文字通りの空間」を拡大したが、同時にまた「意識としての空間」も拡大したことが指摘されている。Part IV, Cultural Performance and Visual Spaces: ギャスケル作品への自然科学の影響、ギャスケルと PRB 絵画との比較、そして翻案が論じられている。

書籍は、上記の 4 パートに加え “Introduction”、“Conclusion”、9 頁を占める “Index” 等を含んでいるが、文献表は独立しておらず、各論文の末尾に “Works Cited” が記載してある。15 編の論文の長さは、図版の有／無を混在させ、9 頁の短い物から 15 頁の物までばらつきがあり、執筆指針では、長さ制限は厳しくなかったと思われる。

II-2. 各論文要旨

Part I. Home Geographies

Chapter 1. Gaskell on the Waterfront: Leisure, Labor, and Maritime Space in the Mid-Nineteenth Century, Robert Burroughs. 海辺はギャスケルの作品や実生活において重

要な意味を持っていた。さらにこの時代、海運は国家にとって重要で、海辺は人々が労働に携わる場となっており、かつ、女性を含む一般人にはリゾートの場となっていた。人々は海が持つ崇高さを経験し、女性は自分たちの新しい姿を発見し、海辺は人と国を改変する場として機能した。

Chapter 2. The Humanizing Transformations of the Space of the Home in Gaskell's *Cranford*, Nóra Séllei. *Cranford* は Jane Austen 流のリアリズム作品とされていたが、フェミニズムの視点から読むこともできる。作品冒頭では、厳しい社会規則のため、女性たちの空間と時間は制限されたものとなっている。しかし、身分違いの結婚、手品がもたらした深層心理変革、異なった文化や経済圏からの帰還者により、冒頭の閉じられた空間は開かれた空間へ再構築されている。

Chapter 3. “You might pioneer a little at home”: Hybrid Spaces, Identities, and Homes in Elizabeth Gaskell's *North and South*, Divya Athmanathan. *North and South* は、Jane Austen 流の結婚プロットと工業化プロットの合成である。小説冒頭では、公私や男女の対立があるが、結尾で主人公たちは多様な追及を許す融合的空間へ移行を見せている。

Chapter 4. Grave Matters: Gothic Places and Kinetic Spaces in Elizabeth Gaskell's *Mary Barton*, Emily K. Cody. 工業化は貧富の差を拡大し、社会全体に空間に対する閉塞観を生んだ。だが、Mr Barton と Esther が同一の墓に葬られる結末は、神により階級社会変化が成される可能性を示唆している。

Part II. Mobility and Boundaries

Chapter 5. Unimagined Community and Disease in *Ruth*, Katherine Inglis. チフス感染防止に隔離が有効であることは、この時代でも理解されていた。しかしこの時代、交通の発達と交易のため、感染症は community に共通する病となっていた。Ruth の死は community がもたらした共通損失であり、しかし同時に community が共通損失を通し統一体となる希望を呈示している。

Chapter 6. Temporally out of Sync: Migration as Fiction and Philanthropy in Gaskell's *Life and Work*, Fariha Shaikh. 移民はギaskellの実生活においても作品においても重要な働きをしていた。移民は問題から逃れたり問題を解決したり正の側面を持つが、また、残される者たちへの心配、過去に関する暗い記憶、移民先での生活不安といった負の側面も持つ。正負を統合勘案すれば、ギaskellにおける移民は、過去と未来を再構築し、家庭が持っていた境界線に急速な変容性を与えるものとなっ

ている。

Chapter 7. Moving Between *North and South*: Cultural Signs and the Progress of Modernity in Elizabeth Gaskell's Novel, Lesa Scholl. 大英博や鉄道は技術の進歩と現代性の象徴となったが、変化に付いて行くことができない感覚もまた、人々の中に醸成した。Margaret は北と南を往復し、小説末尾で Thornton と結婚する。この結婚は、変化の時代に、場の結合が創造性を孕むこと、人々による文化的流動性習得の可能性を表象している。

Chapter 8. In Search of Shared Time: National Imaginings in Elizabeth Gaskell's *North and South*, Mary Mullen. アイルランド人労働者は *North and South* の中で周縁的に登場しているに過ぎない。しかし 1851 年の国勢調査によれば、マンチェスター人口の 15.2% はアイルランド生まれであった。アイルランドは看過できない存在だったが、ギaskell の作品は、イギリスが差異を受け入れる限界を示し、国の根底に差異統合に関する偏狭な無力感があることを暗示している。

Part III. Literary and Imagined Spaces

Chapter 9. Catching the Post: Elizabeth Gaskell as Traveler and Letter-Writer, Kathrin Levitan. ギaskell は、旅行好きで、交際好きだった。こうした彼女にとって、鉄道の発達と Penny Post が容易にした書簡送受は彼女の生命線であった。作家としては原稿を送った。書簡は、家族や友人たちと情報交換するため必需だった。膨大な数のギaskell 書簡を検討すると、彼女が旅により移動性と文化の違いを体感し、体感が作品造形に寄与していたことが読み取れる。

Chapter 10. Gaskell the Ethnographer: The Case of “Modern Greek Songs”, Anna Koustinoudi and Charalampos Passalis. ギaskell は国内外の民間伝承や民話に興味を持っていた。“Modern Greek Songs” は *Household Words* に掲載された小文であるが、この中でギaskell は Claude-Charles Fauriel による *Chants Populaires de la Grèce Moderne* 紹介と自分がギリシャを旅して得た経験を交え、ギリシャに住む人々の生活を伝え、併せてギリシャ自由化運動を支援する姿勢を伝えている。

Chapter 11. Reading “An Every-Day Story” Through Bifocals: Seriality and the Limits of Realism in Elizabeth Gaskell's *Wives and Daughters*, Julia M. Chavez. *Wives and Daughters* はリアリズムの傑作と言われるが、背後にあるヴィクトリア朝帝国主義は無視できない。従って、この作品はリアリズムと帝国主義という二重焦点で読む必要がある。すると、ギaskell がリアリズム小説の中に「二重焦点」プロットを導入している

こと、読者は、19 世紀の現実への認識適合を迫られていることが判明する。

Chapter 12. Gaskell's "Rooted" Prose Realism, Josie Billington. Gaskell を George Eliot、Charlotte Brontë と比較して論じ、歴史上、特に流動性が大きかった時代において、Gaskell は「非定住性を住まう」ことができた作家としている。

Part IV. Cultural Performance and Visual Spaces

Chapter 13. Applied Meteorology: Scientific Accuracy and Imaginative Writing in Elizabeth's "Cousin Phillis" and *Wives and Daughters*, Frances Twinn. ギヤスケルの時代は気象学が勃興しつつある時代であった。*The Manchester Examiner* は 1847 年から「天候レポート」記事を掲載しており、芸術の分野でも、Ruskin や Constable は学問的に学んだ気象学を論述や絵画に活用した。ギヤスケルもまた気象学を活用した作家と言える。しかし彼女は、自分が経験した場所の気象を作品に取り入れ、風景を描く際に気象学を援用し、気象が人間の心情に与える影響を心理描写に取り込んで“biometeorologist”となっている。英文学の歴史中、「天候描写」は確立した長い伝統を持つ。しかしギヤスケルは、「科学」としての気象学を取り入れたことにおいて革新的であり、そして「気象学」の影響は“Cousin Phillis”と *Wives and Daughters* において最も顕著である。

Chapter 14. Women's Voices in the Pre-Raphaelite Space of Elizabeth Gaskell's Novels, Sophia Andres. ギヤスケルは、手紙のやり取り、展覧会を見に行く、PRB に関する評論を読む等を通し、PRB に深い興味を持ち続けた。*Ruth* と *Sylvia's Lovers*、そして John Everett Millais “Ophelia”, Elizabeth Siddall “The Lady of Shalott”, William Holman Hunt “Valentine Rescuing Sylvia from Proteus” を比較検討してみると、PRB の絵画上でもヴィクトリア朝文化中でも抑えられていた声「女性が主体性を持つこと」を表明できる場を、ギヤスケルが模索していたことが分かる。

Chapter 15. “Look Back at Me”: The Material Re-Performance of the Victorian in *North and South* (2004), Amy L. Montz. *North and South* (2004) と記載してある場合は BBC mini-series におけるテレビ作品を、単に *North and South* と記載してあるはギヤスケルの小説作品を指すと注があり、文学作品の翻案を扱った論文である。文学作品の翻案“adaptation”は、原作に忠実であるべきか、それとも解釈に従った独立作品か、という問題は多く論議されており、*North and South* (2004) においても、19 世紀の実際では有り得ないシーンがあるなど、驚きを巻き起こした。しかし、翻案は人々に原作への興味を引き起こし、さらに別の翻案を作り出しという連鎖を作り、

文学作品の場を拡大し続けると言える。

Ⅲ、本書への考察

Ⅲ-1. 優れている点

まず挙げられるべき点は、本書の広さである。論文執筆者の国籍が多様であり、各人の研究歴にも大きな幅がある。読者は多様な視点と見解を示され、未知だった事項への接近を得ることができる。多様と未知との出会いは、研究に対するヒントとなり新領域探求へのモチベーションを生む。本書は研究発展への起爆剤ともなっている。

第2の点は、各論文が“space”と“progress”を鍵としつつ、自由に論を展開していることである。各論文が自由な見解表明であるため、全15編の細部を突き合わせると、対立する読みや矛盾する意見が論文間に浮かび上がる場合がある。しかし、対立や矛盾は、読者の研究推進の機となりうる。

第3は、本書が今日の問題、特にメディアの多様化、を含んでいることである。21世紀の今日、文学を取り巻く環境は、紙の世界ではない。電子の世界であり、コンピューター、コンピューター・ソフト、ネットの世界である。それと共に、文学は文学の領域から脱出して翻案を含む領域となり、テレビ・映画・舞台・音楽・美術等を包含しつつある。翻案の多くは電子技術を利用してさらに翻案を呼んでいる。

本書の意義をまとめれば、広く多様で、現在の文学研究の姿を示しつつ、今後を発展させる力に満ちている言えよう。

Ⅲ-2. 問題点

第一の問題点は、編集に入念さを欠くことである。2つの keywords で募った論文を4パートに分け、一見、論文内容に沿った書籍構造ができているかに見えるが、パート設定とギャスケル全貌との関わりが曖昧である。そしてまた15論文のパート配属は、論文内容と適合しているだろうか？例えば、Chapter 3もChapter 14もPRB 絵画を引きつつ論を進めているが、配属パートは異なっている。扱われている作品も、“place”が影響して *North and South* が多い。編者が対象作品を調整し、より多くの作品からアプローチを得ることはできなかったのだろうか？“Conclusion”は3人の編者の共著となっているが、各論文が多様であるためか、書籍全体の結論を打ち出していない。「今後、新しいギャスケル像が生成されてゆくであろう」と、賢い一般論をもって結論としている。

2 点目の問題は、校正に神経が行き届いていない。1864 年出版と明記された場合“Cousin Phillis”だろうか *Cousin Phillis* だろうか。論文表題における前置詞、“between”、“through”は大文字で始めるべきが、小文字で始めるべきか?“Acknowledgements”中に「この論文集は“the 2012 British Women’s Writers Conference”を機に生み出された」と記載してあるが、大会名においても学会名においても“British Women Writers”が正しい。

3 点目として、すべての論文は結構が整っている。しかし、論文・書籍・文学研究の枠から出て、広く社会全体へ論を訴える熱意を有しているだろうか? 論文で「場の拡大」を言いながら、論文自体は文学研究内でこぎれいに納まることを課題としていないだろうか?

IV. 英文学研究に対する今後への示唆

日本では「英文学研究の衰退」が言われて久しい。英文学研究の閉塞性と非実用性を衰退原因とする見解が多い。しかし本書は「衰退」から「発展」へ転ずるヒントを呈示している。翻案を通して他様なメディアと連携することが示唆されている。他の学問領域との連携も示されている。英文学研究は、他の芸術分野や人文科学・社会科学を用いて研究されることは多かった。絵画と音楽は多く用いられて来た。背景社会は論じられて来たし、『ヴェニスの商人』に資本主義が潜むことが指摘されたりした。コーパスは当たり前のこととなっている。しかし本書では自然科学の応用が進められている。英文学研究が他の学問分野と連携することは容易なのである。それならば、英文学研究が他の研究領域へ出て行けばいい。例えば、絵画を歴史資料として読むがごとく、文学作品を歴史資料とすることも可能である。作品中の心理描写を、今日の人々の心理動向シミュレーションに援用することもできよう。あるいはまた、研究者による解説を付した文学作品朗読会にて癒しの時を創造すれば、ストレス社会に生きる我々に、「音楽療法」ともども「朗読療法」を提供することとなるだろう。

ホラティウス『詩論』は、詩人において「公平な批判から学ぶ姿勢」が最重要としつつ、詩人が持つべき能力の一つに「dulce と utile を結合すること」を挙げている。2,000 年以上、語り継がれて来たホラティウスの助言は、諸学問、あるいは人すべてへの普遍性を持つだろう。英文学研究が、広範な領域・各種メディアと批判を交わしつつ、甘美さと有益性を追求すれば、英文学研究は発展するはずである。

(埼玉大学名誉教授)